

# 令和6年度 男女共同参画社会づくり作文コンクール



男女が互いにその人権を尊重し、責任をともに分かち合い、性別に関わりなく個性と能力を十分に発揮できる「男女共同参画社会」の実現に向けた意識を高めるため、市内の中学生を対象に、男女共同参画に関する作文を募集しましたところ、数多くの作品が寄せられました。

ここに、入賞作品をご紹介します。

作品応募総数697点

(敬称略・五十音順)

## 【最優秀賞】

だれもが自分らしく生きられるように

八尾 中学校3年 京 優希

## 【優秀賞】

男性の育児参加について

堀川 中学校3年 石川 ゆい

男女平等な暮らしへ

南部 中学校3年 石田 梨奈

幸せの道をひらく男女共同参画の鍵

片山学園 中学校1年 稲垣 愛美

誰もが自分らしく生きられる社会へ

南部 中学校1年 榊谷 文香

## 【佳作】

ジェンダー平等先進国を目指して

堀川 中学校3年 網谷 紗也佳

性別にとらわれず自分らしく生きる

大沢野 中学校2年 五十里 琉奈

変わってゆく「当たり前」

南部 中学校3年 井坂 友郎

「男女平等」を目指して

八尾 中学校1年 金厚 満莉乃

互いの違いを受け入れ柔軟に生きたい

堀川 中学校3年 北村 武士

目指せ富山のウェルビーイング

堀川 中学校3年 小橋 菜々実

触れたら考え共有する

南部 中学校1年 高橋 朝子

男女平等について考える

大沢野 中学校1年 浜屋 咲希

政治における男女平等

堀川 中学校3年 丸山 司真

自分らしく

呉羽 中学校2年 村上 梨花

## 最優秀賞

### だれもが自分らしく生きられるように

八尾中学校 3年 京 優希

「女の子なのになんで髪の毛短いの？」

ショートカットの私が、親戚の小学生の男の子から言われたこの言葉。私は違和感を覚えたのと同時にどこか悲しい気持ちになりました。自分が好きな髪型だけでなく、自分自身を否定されたようで、心がぐっと締めつけられる。テレビで見た、男女差別に苦しむ人たちの気持ちが、初めて少しだけわかったような気がしました。

近年、世界で「ジェンダー平等」が叫ばれ、私たちの意識は高まっていると思います。一方で、その国の男女の差を示す、ジェンダー・ギャップ指数ですが、最新のデータで、日本は146か国中、118位でした。これを見て、私は残念に思いました。この結果の背景には、多くの人の中にも、「男だから」や「女なのに」といった言葉がまだあるのではないかと考えました。

思い返せば、私も、別の親戚の男の子が、ヘアドネーションをするために髪を伸ばしているとき、

「男の子なのに、えらいな。」

と思ったことがありました。他にも、サッカーをしている女の子やピンク色が好きな男の子がいると、「男だから」「女なのに」といった枕詞が浮かぶことがあります。私は、私自身が、ジェンダーの考え方に偏見をもっている日本人の一人かもしれないと思いました。

私のように、染みついた男女のイメージが消えない、そんな人はたくさんいると思います。しかし、そのほとんどの人は、男女差別はいけないとわかっていると思います。だから、私は、「ジェンダー平等」な社会はつくることができると思います。重要なことは、一人一人を尊重することです。ショートカットヘアの自分、サッカーをする女の子、ピンク色が好きな男の子、みんなが大切な一人の人間です。「男だから」「女なのに」ではなく、「男でも」「女でも」さらには「誰でも」。今は意識が必要かもしれませんが、将来的にはそれが当たり前の社会になってほしいです。

優 秀 賞 (4 点)

## 男性の育児参加について

堀川中学校 3 年 石川 ゆい

私がこのテーマを選んだのは、我が家にとって身近なテーマだからです。

私の両親は共働きです。母は、私が産まれた時、育児休暇を取得していたものの、ずっと働きながら私を育てていくか大変悩んだそうです。なぜなら、育児は想像以上にとても大変で体力的にも精神的にも辛い事だからだそうです。そんな時、父が「ずっと家の中で育児と家事をしているより、外で社会と関わっている方がいいんじゃない？」と言ってくれ、母は働き続ける事を決めたそうです。

しかし、実際は、保育園に預けても、熱を出したり、ケガをしたりと会社を休まなければいけない事が多く、大変苦労したそうです。しかし、それを乗り越えられたのは、父がさり気なく食事を作ったり食事の後片付けをしたりと家事を手伝い、母に「大丈夫か」と声をかけてあげたからだそうです。

そうして母が育児と仕事を両立する姿を見て母の周りでは出産後も働き続ける人が増えたそうです。

「男性の育児参加」を義務づけると、男性の方は、かつての女性が感じた「女性は子供を産み、育てる」という義務と同じように苦しめられていくと思います。それよりも目の前にいる家族を助けたい、少しでも役に立ちたいと思う思いやりの心が「子どもは女性が育てる」から「子どもは夫婦で助け合って育てる」に変わっていくのではないのでしょうか。

## 男女平等な暮らしへ

南部中学校 3年 石田 梨奈

昔の日本では、男性は働きお金を稼ぐ、女性は家事をして家を守るという考えがあり、そんな家庭が多かった。しかし、今は親が共働きや、昔とは逆の家庭も少なくはない。私の両親は、私が幼い時から共働きである。仕事が忙しかったとしても父は朝と夜にごはんを作り母は皿洗いと洗たくをするなどきちんと役割り分担をしている。お互いに出ることを協力し合って生活を支え合っている。また祖父母の力もたまに借りることで家族全体がつながって生活が成り立っている。そのおかげか幼い頃から寂しい思いはせず毎日楽しかった思い出しかない。このように働く女性が増え、社会的には男女平等になってきていると思う。しかし男女平等について調べてみると女性を守るためや女性の地位向上のための活動が多いということが分かる。あまり、男性のことは取りあげられていない。私はこれに、女性中心で考えられているような印象をもった。私は、今の社会のことはよくわからないが、女子だから男子だからしてはいけない。しなきゃいけないという固定概念は無くなってきたと思う。学校生活を振り返ってみても、男女平等に施設や教育を提供されているし、差別なく評価され内申がついていると思う。また、体育の授業でも二年生から男女一緒になり協力して準備や授業に取り組んでいる。私は、男女平等とはどんなことでも男女同じくやることではなく、男女がお互いの能力を認め合って、性別を気にすることなく、人間として助け合っていくことだと思う。それが、男女平等の理想的な社会をつくっていくのだと思う。また、男女平等は誰もが幸せに生きるための基本的な価値観だと思う。だからこそ、私達若い世代がその重要性を理解し行動に移すことが必要だ。私はこれからも、男女平等の社会を目指して、自分の立場でできることを精一杯頑張っていこうと思う。そして将来、私が結婚した時は、お互いが出ることを協力して助け合っていける家庭を作れたらいいなと思う。

## 幸せの道をひらく男女共同参画の鍵

片山学園中学校 1年 稲垣 愛美

「幸せだな」としみじみと感じた。母が、仕事で使うパソコンを開いたまま、私の顔を見て笑っている。父が、夕食後の皿洗いを済ませてから、弟とトランプゲームで盛り上がっている。私の家族団らんのひと時だ。

我が家は、三世代同居で、祖父母と父母・弟との6人家族だ。父母は、平日は夜遅くまで仕事をし、週末は出張に出ることがある。早く帰宅したかと思うと、オンラインで会議を始めることもある。父母と過ごせない時間は、祖父母と過ごすのだが、実はこれまた幸せな時間だ。祖父母の笑い声が部屋にひびき、つられて笑ってしまうような楽しい時間だ。

しかし、社会でこのような家族のあり方を示すとしたら、賛否両論あるのではないだろうか。厚生労働省の「働く女性の状況」によると、雇用者総数に占める女性の割合は令和4年に45.8%で、いまだ半数に満たない。女性の社会進出はよく聞くが、それは半分以上は専業主婦ということだろうか。亡くなった曾祖母が、昭和初期には女性が意思を自由に表現する機会が少なかったと話していた。もしかすると、令和時代の今もなお、女性が働く意思を持つことやそれを支える環境は、限られている現状があるのかもしれない。

自分の幸せを実感できることが、人生の豊かさの秘けつだと私は考える。家族の笑顔だけで幸せを感じる日常は平凡かもしれないが、私には家族それぞれが意志を叶えた成果のようにも感じられる。なぜなら、就業も家事育児の役割も、祖父母と父母が、それぞれが望んだ夢そのものだからだ。これはまさに、「男女共同参画社会」の実現だろうと思う。男女ともに、夢や意思を持つこと、それを叶えるために努力すること、その道を周囲が尊重し応援するような社会が理想だ。それには、個々の知性と支える環境が必要だろうと思う。

私は、中学生の今、知性を磨き、男女ともに様々な機会への参画が自由だという知識を得て、それを支える人や物の仕組みを理解し、幸せの想像力を養っていきたい。また、支える環境として、昭和初期のような大家族があっても良いし、最新技術の開発やそれを自由に使う選択があっても良い。このような自由な発想と表現の機会が、「幸せの道をひらく男女共同参画の鍵」となり、人々の幸せと豊かさを叶える力になるのだろうと信じている。

## 誰もが自分らしく生きられる社会へ

南部中学校1年 榎谷 文香

私は13年間生きてきて、性別で差別を受けたと思ったことはない。でも、NHKのドラマ「虎に翼」を見て驚いた。昔は女性が弁護士になれなかったのだ。やっとなれても、なぜか裁判官や検事にはなれない。それ以前に学校で学ぶこともできない女性、学ぶという選択肢があることも知らない女性がいたというのだ。

祖母にきくと、「そういう時代もあったのよ。あなたのひいおばあちゃんは、先生が家まで来て進学をすすめてくれたけど、女の子だからと行かせてもらえなかったの。もっと勉強したかったのに。」と話してくれた。曾祖母は「虎に翼」の主人公と同年代だ。

祖母は大学に進学して先生をしていたが、出産の時には育児休業がなく、二カ月ほどで職場に戻ったそうだ。育児休業が必要だと訴えるために、先輩の先生方が県庁で座り込みをしていたとも教えてくれた。その後、育児休業の制度が整備されていったそうだ。

母は若い頃、同じ仕事をしているのに男性ばかりが研修や試験を受けさせてもらうのをそんなものかなと思っていたそうだ。上司が変わり、「研修に行く？」と聞かれた時、驚いたけれど、嬉しかったと話してくれた。

曾祖母や祖母の時代と比べて、現代は性別が理由でできない仕事は思いつかない。男性も育児休業を経験した方が良いと言われるようになった。男性の看護師さんも珍しくないし、大きなトラックやクレーン車を運転する女性もいる。私は、好きな仕事を頑張っている人は生き生きしていてとても格好いいと思う。

今回、今の当たり前が当たり前でなかった時代があったことを知った。女性も男性も、私も、他の誰かも、自分らしく生きられる社会を、私たちがこれからも作っていかないといけないと強く思った。